

天照大神とスサノオノミコトと日本国誕生

島田 建仁

青山ライフ出版

神話からの連想

神話から歴史という世界にご招待いたします。

天照大神とスサノオノミコトと日本国誕生◆目次◆

日本漂流	5
誕生前夜に	5
黄泉の国	6
天の岩戸	8
八俣の大蛇	10
八重垣神社	12
日本国誕生	13
徳山堂の本	16

天照大神とスサノオノミコトの日本国誕生

小生、大晦日に暇つぶしにでもと、出雲大社へブラブラと出かけました。

大晦日の大社は、正月と違い、人はほとんど居らず、静かにたたずんでいました。やがて太陽が沈んでいくと、自然と日本神話が思い出されて来るのでした。

以下、神話からの連想です。

―神話の始めを、先進民族が日本に漂流した、とする。

日本漂流

その昔、中国に「日出ずる東の地に、黄金の日輝く、日本の国がある」と信じられていた。中国戦乱の世、国を滅ぼされた王子が、日の本の国を求めて東へ東へと航路を取っていた。そして、ある島に流れ着いた。頃は四月だった。島は、いつも雲に被われ晴れることがなかった。王子はこの島を雲出する所、「出雲」と名付けて住みついた。これが後の出雲大社、であり、その王子の子孫が天照大神（神武天皇の祖）となった。

誕生前夜に

日本国誕生前に、出雲の国に、国が崩壊せん程の慟哭があった。王（イザナ岐の神）と女王（イザナ美の神）の間の子は全て「蛭子」か「白痴の子」であった。

人々は、「はるばる末開の遠地にまで来て延命を計った王国も、これで終わりだ。」と噂し合っていた。そして、よりよって、その不肖の子の為に女王が火傷を負って亡くなってしまった。

王は「いとしい我が妻よ、お前はこんな子の為に命を交換してしまった！」と、枕元に腹這い

になつて、足元に腹這いになつてオイオイと泣いた。その側では白痴の子がヘラヘラと笑つてた。

この奇妙な光景に人々は黙つて下を向いていた。

すると、突然、王は十拳剣を抜いて王子の首を斬り捨てた。

「ギャー」という声とともに真つ青な笑つた首が、血とともに空中に舞い上がった。人々は、どよめいた。そして、茫然としている人々の間をぬつて、王は舟に乗つて出雲の国を出て行つた。

黄泉の国

出雲の島より海を隔てて日本の国がある。その未開の地には汚らしい獣の様な蛮人が住んでいた。王はその未開の地に入つて行き、夢遊病者の様に何日もさまよい歩いた。ふと気がつくとき未開の蛮人の村の中に居た。同じ温かい人間が、王を親切に介抱してしてくれたのだつた。王は、卑人、として殺される所を、首長の娘に保護された。

熱心に介抱する娘を見た首長が、村人に「卑人ならば海で倒れているはずだが、山の中で倒れていたのだ。着ている物からして高貴な人だ。もし隣国の王子ならば、村全員、逆ずりにされて

頭の皮をはがされ殺されるぞ。」と言った。これには村人も、一言も反論できず王は助けられた。王はそこに住みついた。

ある日、子供がベチャクチャと話かけて来た。三歳たらずの子が、またたくまに中国語を覚えて王と会話できる様になった。

王は、こんな賢い子が我が子だったらと出雲を思い涙した。

王はこの女の子に、出雲にある夢の国の話しをした。すると、その子（後の天照大神）は目を輝かせて聞いて「夢の国に行く」と言った。

一年が過ぎて、王を介抱した娘にも男児（スサノオノミコト）が生まれた。

王は海洋民族である為、原住民の食事が嫌になって、海から海獣を捕まえて来て血を流しながら生で食べた。それを見た蛮人達は騒然となった。「気持ちの悪い卑人だ。殺してしまえ。」と。

真つ青になった娘は王に「あなたは卑人の食べ物食べてしまった」と言った。そして殺気立つ村人を説得しに行つた。そのすきに、王は子供達を奪つて逃げ出した。逆に赤子を奪われた娘は、狂乱し泣き叫び、蛮人達は王を追いかけた。蛮人達は、もうムリだ、と追いかけるのを止めたが、娘は最後まで王に追いつがって行つた。

やつとので舟の所に着いた王は、娘を振り払つた。すると、娘は「あなたが、この様な事をなさいますならば、私達はあなたの国の卑人を毎日千人殺しましょう」と言った。これに答え

て王が、「我々は、毎日千五百人の子供を生もう」と言い返した。
そして出雲の国に、死んだと思われていた王が健康な後継ぎを連れて帰つて来た。王は蛮人に備える為、富国強兵を命じた。

天の岩戸

時が過ぎて、この小さな出雲の島にも若き世代が叫びを上げて躍動を始めた。王の子、スサノオノミコトは蛮人の血を嘆き悲しみ、「母の国に行く」と暴れ出した。指導者達は「王の血」が止絶えるのを恐れ、何とか結婚させようと、「未開の国に行く前に、天照大神に暇迄いする様に」とミコトを向かわせた。ミコトは、願いがかなったと思い、嬉び勇んで国中に、ドラ、を轟かせて、天照大神の元に行った。あまりの騒がしさに、天照大神は驚いて「ミコトが国を奪いに来た」と感違ひして、髪をぐるぐる巻き上げ男装し、女の体に戦闘服を着込んで弓矢を取り、雄々しい叫び声を上げて待ち構えた。その事は又、ミコト達を刺激してしまつて天の安河、で両軍が剣を抜いて対じた。指導者達は二人を結婚させる予定だったのが、逆に一触即発の状態となり、あわてて中に入った。

指導者達は、呪術の占い、という策を用いて二人を結婚させる事に成功した。

二人に子供が生まれた。子供が生まれるにつれ、指導者達の、策、をウスウス感付き始めたミコトは、ある時、天照大神に語りかけた。

「海の向こうに我々の本当の国が有る。ここは架空の世界だ」。

これに答えて大神は「出雲国は、すぐれた文明国だ。私はあんな汚い蛮人ではない」と。

これにミコトは怒り、天照大神の田をつぶし、御殿に大便をし散らした。人々は恐れるも、ミコトの心は荒んでいき、王家と平民は結ばれてはならないと言う、王の掟、を犯し、「オレが、そんなに汚いか」と人を殺すに到った。

そして、ミコトの子を宿した娘は、泣く泣く遠き「韓の国」へ島流しとなって行った。

ミコトの所業、とどまる所を知らず、天照大神と彼女が寵愛する側女が織物を織っていた、その御殿の屋根に穴をあけ、生き馬の皮を剥ぎ、血だらけで鳴いている馬を投げ込み、ミコトは狙っていた側女を殺してしまった。

これには天照大神も恐れ、天岩戸に身を隠した。ミコトの家来や悪人達は、ここぞ、といい気になって暴れ出し、出雲の国は正に悪黒の世となって行った。

これを以って人々は、自然と集まり、相談をして「天の宇受女」をもって、奸計を策した。天の宇受女は、ミコトに向かって言った。「私は混血よ！こんなに美人にしてくれたと蛮人の血

に感謝してるわ。あんたは王様のくせして、いつまでも女々しく蛮人の血を気にしている、全く、だらしのないわ！」と。ミコトが、うなだれている間に、女は忍んでいる武人達に合図してミコトを捕らえてしまった。人々は、やっと安心し、嬉しさに踊り出した。英雄となった天の宇受女を中心に、飲めや歌えで出雲の国は、夜が明けるまでお祭り騒ぎとなり、天の岩戸、の歓喜は、こうして始まっていった。

八俣の大蛇

ミコトと家来は未開の国に流刑となつて、蛮人からも身を守る為、山奥の中に分け入った。こはミコトが出雲から見つめ、あこがれていた、母なる大地、である。見る物聞く物、全てミコトの胸を踊らせていった。

秋も深まる頃、なお山奥に人の気配を感じ、ミコト達は川を上って行つた。この川の沼地に、多くの大蛇が生息していた。村人は昔から大雨と洪水は、大蛇様が怒る為だと信じ、毎年、少女を大蛇の、生けにえ、に供していた。

村では人々が、にぎやかに火の回りを踊り、お祭りが行われていた。そして首長が合図の声を

上げると、人々はクモ子を散らす様に消えて、一瞬の内にシーン、となった。ミコト達は、夜遅くなるのを待ち村に入つて行つた。

すると全ての家は閉ざされているのに一軒だけ焚火がコウコウと焚かれ、家の中では老夫婦と美しい娘が、泣き悲しんでいた。

老人は、ミコト達を恐れず「毎年、この娘の姉達が大蛇に供され、今こうしてたった一人残つたこの娘も大蛇に食べられようとしています。」と涙ながら語つた。何か深い訳がある、と感じたミコトは、翌日になつて、娘の元に忍び込んだ。そして、まさに娘が大蛇に供せられんとするや、獲物を求めて多くの大蛇が群がつて来た、その沼にミコトは剣を持って、飛び込んだ。

死闘が繰り広げられ、沼はみるみる真赤に染まつて行き、やがてミコトは大蛇を全部退治してしまつた。村人達は驚嘆し、老夫婦は喜び、ミコトの前にひざまずいた。ミコトは未開の蛮人に、剣の威力を見せつけたのだつた。

しかし、村人の中には逆に反感を持つ者がいた。「大蛇を殺し娘を助けたから、今に必ず大洪水が起ころぞ。」と、ミコト達を襲つた。ミコトは、これを撃退し、中国の治水事業と新しい文明を、未開の蛮人に教えた。

この様にして、この地より画期的な文明が開かれて行つた。

——出雲の縁結びの神に、安来節を加えてみる。

八重垣神社

スサノオノミコトは、イザナギ王が子を奪った所を原住民に尋ね、母の消息を聞き、母の地へと出かけて行った。

その地に着き、ミコトは言った。

「私は、ここ母の地に来て心もちが安らかになった。」と。それで、この地を安来と言う。出雲人と原住民が交歓し合い、ミコトを中心に、歌い踊り、これを祝った。この時の、踊り、がドジョウすくい知られる安来節として今に伝わる。未開の荒野にミコトは、八重の砦を造り、その中で妻子を養った。今の八重垣神社で、原住民と出雲人の縁結びという新しい時代が始まった。そして、出雲人にも、日本国への門戸が開かれていった。

日本国誕生

歴代の出雲の王は、滅んだ中国の王国の再興を願う消極的な王であった。だが、天照大神は違っていた。天照大神が告げた。「東の彼方に、黄金の日輝く、日の本の国があると聞く。これより出かけ、日の本の国へ行け」と。この言葉により、出雲人は多くの舟を作り、勢いよくドラを打ち鳴らし、日の本の国を求め舟出した。

出雲人の造船技術と武器は、たちまちにして制海権を得、日本の内外を問わず多くの出雲人の港を作り、その数は百を越えるに到った。

天照大神が晩年に言った。「夢にも見る日の本の国を、一度見てみたい。日の本の国を見つけたら、我が骨を埋めよ」と。これにより、はるか彼方の東の地、伊勢に天照大神の形見を埋めた。制海権は、交易により新しい文化、武器を吸収して、より強い力をつけ、大和朝廷成立は、もはや時間だけの問題となつていった。

天照大神の子孫たちは、九州の港で相談をした。「一つ天下を泰平にしてやろう。どの地が、天下を泰平に治めるに良いであろうか」と。その地を現在の奈良県に決め、その首長を打った。これが神武天皇であった。

これを助けたのが、既に中国地方に強国を形成し、まさに天下に号礼せんとしていたスサノオ

ノミコトの子孫・大国主命であった。

原住民の首長達は出雲人・島根人に次々と従って行った。

そして、出雲人を一步も寄せつけなかった「伊勢」以東の、おびえ死ぬ程まで恐れていた勇猛な先住民族も、天照大神とスサノオノミコトの子孫・日本武尊に征服されて、ここに日本国が誕生した。

……と言う風に下手な空想をしていると、知らぬ間に新年が明けて来ました。

■ 神話から日本国誕生の歴史へ

皆様に、日本国誕生の歴史に御招待いたします。

大国主命 前篇

五百円

小さな出雲の島が、小さな根の国が、如何に西日本に広がる大国になったのか。日本国を創った「大国主命」が、大国、を誕生させる物語。歴史書に無い、日本国誕生の、悠久の歴史を述べていく。

徳山堂の本

日本国を創りし

大國主命

島田建路

千八百円

神話は日本人の心の故郷です。

神話から歴史へ、大國主命による日本国誕生の世界に御招待します。

小さな出雲の島が、小さな根の国が、如何に西日本に広がる大國になったのか。大國主命が、大國、を誕生させる物語。

又、神武天皇の東征と神話の大事変・大國主命の国譲りは何故に起こり、それが如何に日本国誕生につながって行ったのか。

歴史書に無い、神話にも無い日本国誕生の歴史を述べていく。

神功皇后

島田建路

千八百円

神功皇后は朝鮮三国を神の如きに天の如きに征服した英雄である。

神功皇后の朝鮮遠征ぬきに現代の朝鮮問題を語る事は出来ない。

又、神話は日本建国、日本誕生の伝説ではない。

卑弥呼が明らかになる歴史でもある。

神話から歴史へ、日本国誕生の世界に御招待します。

蘇我家を滅ぼし大化の改新をなした

卑人 藤原鎌足

島田建路

千八百円

近代まで特権貴族として君臨した天下の藤原家の創始者・藤原鎌足は卑人と呼ばれ、特別に低い身分で、差別されて現地人と交わる事も無かった。

卑人とは魏志倭人伝に出てくる邪馬台国を作った卑弥呼と同族の民であるが、ここ大和朝廷において、ちょうどアメリカのマフィアの様な少数民族であった。

口は気の病をなぜ治すのか 宮城三郎 九百八十円

口は健康の源である。

口から健康医学を述べる事で、西洋医学、東洋医学、歯科医学、等の医学、そして呼吸法、氣功法が分かりやすくなる。

口は健康の源

宮城三郎

千八百円

口から健康の方法をお教えます。

氣の病の、氣、とは電磁波です。

健康を形成する氣・電磁波は口から始まり口で終わります。

その氣・電磁波は、生きたものではないので死んでも残る。

即ち亡くなった人の氣・電磁波・靈魂が残る説明になる。

それは何千年も前から言われている事です。

口から神羅万象の健康医学をお教えます。

徳山堂の本

徳山堂

所在地 静岡県浜松市

メール tokusando@yahoo.co.jp

天照大神とスサノオノミコトと日本国誕生

著 者 島田 建仁

発行日 2013年7月10日

発行者 高橋範夫

発行所 青山ライフ出版株式会社

〒108-0014

東京都港区芝5-13-11 第2二葉ビル401

TEL：03-6683-8252 FAX：03-6683-8270

<http://aoyamalife.co.jp> info@aoyamalife.co.jp

装幀 溝上 なおこ

© Kenjin Shimada 2013 printed in japan

ISBN978-4-86450-078-4

※本書の一部または全部を無断で複写・転載することは禁じられています。